

内藤 博夫

1983年10月7日、イギリス・ヨークシャー羊毛工業の中心地リーズに向う途中でヨークに一泊した。知人から中世都市の面影をとどめるヨークをぜひ見ておくようにすすめられていたためである。城壁でとり囲まれたヨークの街は観光地といわれながらもけばけばしさのない落ち着いた雰囲気をもっていた。またヨークミンスターと呼ばれる大聖堂の豪華さには目を見張らされた。ロンドンの旅行案内所を通じて予約してあったホテルはレンガ造り2階建ての民家を改造したもので、日本流に言えば民宿に相当する。しかし夕食を用意する施設はないので外でそれをとることにした。ホテルの女主人はヨーク駅付近のイタリア料理店と中華料理店をすすめてくれたが、横文字のメニューを見て注文する自信はなかったので中華料理店に入ることにした。店の名前は北京亭、小柄な中国人ウェイトレスがてきばきと客の注文に応じていた。

10月9日、イギリス旅行を終えてパリに移動した。午後1時に「大学都市」地区にある日本館を訪ね、館長をしておられる東大の小堀巖先生にお会いして「大学都市」および日本館の概要をうかがった。この地区には各国の留学生会館が思い思いの建築様式で設置されていて、その歴史は50年にも及ぶという。このような施設のために用地を提供し、パリの一角に「大学都市」を作り出した当時のフランス政府の国際感覚と文化行政の水準の高さにあらためて敬服した。日本館を辞去し、市内を散策したあと夕食をとる段となったが、1981年にパリを訪問したときに利用した中華料理店を今回も利用しようと思い、以前泊ったホテルの前にさしかかったところ、1階の一部が日本料理店に改造されていることに気がついた。そこは泊り客がパンとコーヒーの朝食をとる喫茶室がおかれていたところである。目ざす中華料理店はあいにく休業日だったので渡りに舟とばかりにこの日本料理店に入

り、お茶づけ御飯で夕食をすませた。もちろんウェイトレスはあてやかな和服姿の日本人女性。客の数は10人前後で客の入り具合はまずまずの状態であったが、フランス人の女性客が1人いたほかはすべて日本人であったことが気になった。パリで開店しているとはいっても基本的には日本人観光客相手の食堂にすぎないように見受けられたからである。

10月10日、パリから急行列車で国際会議の開かれるリールへ移動した。ホテルに着いたのは午後7時頃だったので荷物を部屋に降ろすとすぐに夕食をとり外に出た。幸いホテルのすぐ向いに中華料理店があった。その名も北京亭、ヨークの店の名前と同じである。さっそく店の中に入ると20代後半と思われるウェイトレスが英語で注文聞きにきたので、ついでにこちらからも出身地などをたずねてみた。彼と彼の家族はカンボジアで食堂を営んでいたが戦争のためにフランスにやってきたという。つまり彼らはカンボジア革命戦争の過程で生じた難民の一部であり、かつてのカンボジア植民地宗主国であるフランスに落ちのびてきたのである。人口17万余りのリールで、経営がなり立つのかどうか質問すると、市内には同業者が13軒あるくらいだから大丈夫だという。フランス人相手に、しかも1地方都市でこれだけの数の中華料理店が営業しているとは思ってもいかなかった。ヨークとリールで見たと同じように中華料理はヨーロッパの社会の中に深く根を下ろしているように思われる。油と肉をふんだんに使う中華料理はヨーロッパ人の味覚に合う面をもっているのかも知れない。それに比べて日本料理はヨーロッパの人たちからみればまだ異質なものに映っているのだろう。料理も文化の1表現であるとするれば、料理の受容のされ方を通じて日本文化の特殊性と中国文化の底力について考えさせられた旅行だった。

東京と江戸の大雪

三上 岳彦

今年(1984年)の1月、東京では3回の大雪に見舞われた。月平均気温も3.7°と平年よりも1°低く、例年になく寒さの厳しい冬であった。東京で大雪が降るために

は、日本の南岸近くを低気圧が発達しながら通過する時、上空に北からの寒気が流入することが必要である。低気圧が接近しすぎて暖気が侵入したり、北からの寒気が弱